

同志、金沢の地に集う

vol. 283 / September. 30th 2019

9

Companion who are Fighting in the Same Field Met up in Kanazawa

今月の初旬、全国の建築・都市の研究者が金沢に集った。現在の同志と議論を交わし、迫力ある建築に過去の同志の影を見た。本号では2019年度日本建築学会について特集する。

—Contents

- P1 2019年度建築学会大会とは
- P2~P3 金沢工業大学キャンパス計画
- P4 プロジェクトにおける実践・研究・発信
- P5~P7 デザ研メンバーによる発表一覧
- P8 門下生、大集合！ +Information

2019年度建築学会大会とは

text_MUNENO /M1

What's "Academic Conference of Architectural Institute of Japan in 2019" ?

9月3日から6日の4日間、石川県野々市市の金沢工業大学扇が丘キャンパスにて、2019年度日本建築学会大会が開催された。全国大会が行われるのは年に1回であり、本大会には全国の建築系の専門家や学生述べ約10000人が集結。一言に建築と言っても、建築意匠、設備、構造、材料、生産マネジメント、都市計画、農村計画など多岐にわたる。筆者は9月2日の夜に金沢に到着したが、既に服装や雰囲気からそれとわかる建築系学生たちがごった返し、異様な雰囲気が漂っていた。学会の開催期間中、金沢市内の多くの宿泊施設が満室となったという。

大会では、当研究室メンバーからの発表が多かった学術講演会をはじめ、建築デザイン発表会、研究テーマごとにパネリストの基調講演とそれに関する議論が交わされる公開パネルディスカッションや、設計競技の公開審査会など、多彩なプログラムが用意されていた。プログラムとらみ合いながら、関心のある発表とイベントをピックアップし、4日間のスケジュールを練ることもまた楽しい。普段会う機会の少ない他大学の同志と語り合い、自分や研究室のメンバーと全く異なる研究テーマに出会い驚き、パネルディスカッションで先生方と同じ聴講席に座り同じ講演を聴く。どれも貴重な体験であった。自分たちは学生だが、研究者の一員であるということをもっと感じた、刺激的な4日間であった。

9/3 (火)	4 (水)	5 (木)	6 (金)
学術講演会 9:45-13:00 都市計画部門パネルディスカッション 「立地適正化計画の適正化計画」 10:00-17:30 2019年度日本建築学会設計競技 「ダンチを再考する」 講評審査・表彰式 15:00-16:10 2019年度日本建築学会優秀卒業論文賞・優秀修士論文賞表彰式	学術講演会 建築デザイン発表会 9:45-13:00 都市計画部門研究協議会 「ローカルな動きを創発編集する都市・地域の計画フレーム」 15:00-17:30 2019年度シャレットワークショップ 「事前学生のまちづくりデザインを考える」 講評会	学術講演会 建築デザイン発表会 9:30-13:00 縮小社会における都市・建築の在り方 検討特別研究協議会 「2030年の都市・建築・くらし」 9:30-13:00 建築歴史・意匠部門研究協議会 「都市と大地、その可能性」	学術講演会 建築デザイン発表会 9:30-13:30 建築計画部門研究協議会 「建築・都市・農村計画研究者の方法論的転換」 14:00-17:30 都市計画部門研究協議会 「生きた景観マネジメントの実践」

4日間のスケジュール（一例であり他にも様々な講演会やイベントが開催された）



会場：金沢工業大学扇が丘キャンパス
住所：石川県野々市市扇が丘 7-1



都市デザイン研究室修士2年による発表の様子

金沢工業大学キャンパス計画

The Campus Plan of Kanazawa Institute of Technology.

バスで金沢駅方面から野々市市方面に向かい、道なりに進むこと20分。右折すると見えてくる、コンクリート打ち放しの建築群の圧倒的な存在感に誰もが注目したことであろう。

2019年度建築学会大会の会場となった金沢工業大学扇が丘キャンパスの北校地は、都市デザイン研究室の2代目教授・大谷幸夫とその門下生により設計された。キャンパスは段階的に建設されており、第1期に学術講演会において都市計画分野の発表が多く行われた本館と土木工学館、第2期に3号館と5号館、そして第3期にはキャンパス内で一番高く、シンボリックな形態であるライブラリーセンターが建設された。ここでは、我々の先輩方が設計に携わった金沢工業大学北校地のキャンパスが、どのような思想に基づき組み立てられていったのかということ、計画図や配置図、大谷幸夫の言説をもとに筆者なりの解釈を交えてご紹介する。



中庭からライブラリーセンターを臨む

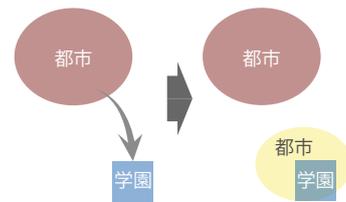


金沢工業大学扇が丘キャンパスのエリア分け (Google map の航空写真を加工)

学園計画による都市の再編

1960年代後半、全国の都市は急成長真っ只中。都市中心部は過密でありまとまった敷地を確保できないことや、学園紛争への警戒等の理由から、学園は郊外へ追いやられることが多かった。初めこそ学園周辺には田園地帯が広がっているのであるが、そこには次第に都市的機能や市街地が誘導される。つまり、学園建設による市街化の意識的な誘導が可能であり、市街化の質的・形態的規定を意図できるということになる。また、都市を支えるものが産業開発から文化の創造・

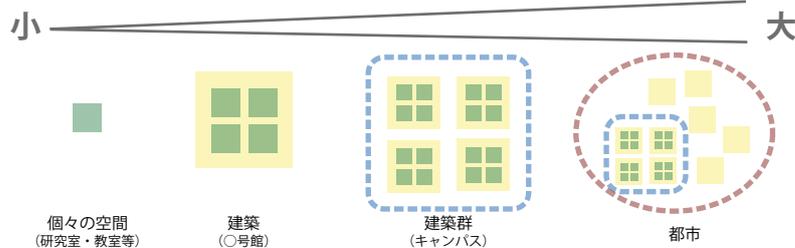
伝達に関する教育・文化活動に少しずつシフトしてきている世の中において、学園の建設はその立地する地域の組織化へ効力をますます発揮する。学園の建設が社会の圧力を制御し、その圧力が国土の再編成に働くような契機となることを期待すべきであり、その社会的エネルギー転換の技術こそが、計画の技術なのである。金沢工業大学のキャンパスは、そのような学園の建築群が都市に与える影響を最大限考慮して計画された。



学園計画による都市の再編

スケールの異なる3つの「個と総体」

金沢工業大学北校地キャンパス計画における最も重要なテーマは、「個」とそれらの集合である「総体」の関係性のあり方である。大谷幸夫の言説を解釈する中で、この計画において検討された「個と総体」には大きく3種類あると考えた。1つに、①各々の建築を構成する個々の空間とそれらの総体である建築全体、次に②各々の建築とキャンパス全体、3つ目に、③建築群と都市である。一方では「個」であった要素が他方では「総体」となり、異なるスケール間が「個と総体」の関係性によって繋がれている。



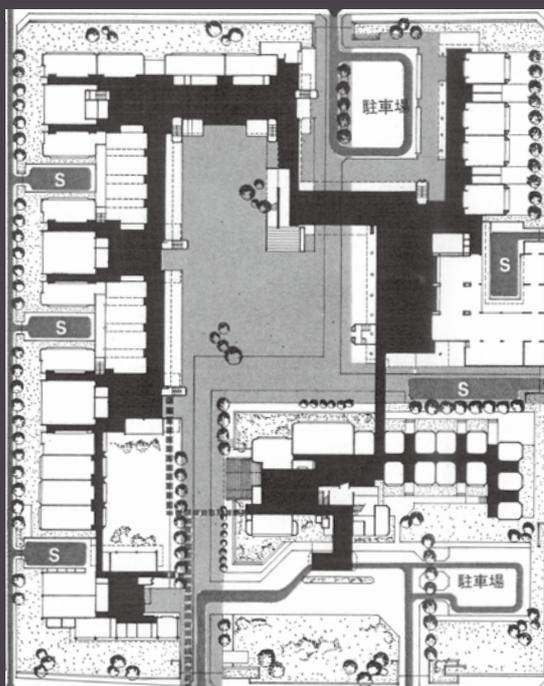
「個と総体」の関係を検討する単位とスケール

計画当初のマスタープラン 第1期 1969年竣工

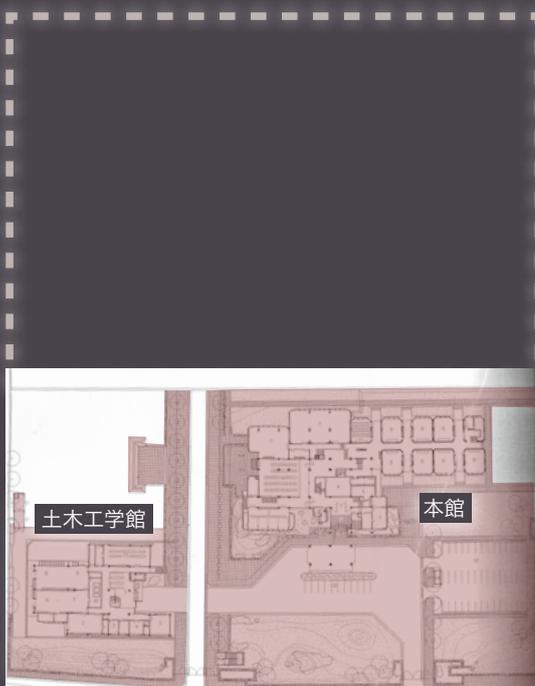
本館・土木工学館

第2期 197

3号館・5号館



キャンパス・プラン S=1:3000 (出典: 建築文化 1968年11月号)



第1期配置図 S=1:3000 (出典: 新建築 1969年10月号)



第2期配置図 S=1:3000 (出典: 新建築)

① 1つの建築の中の個と総体

ここで個とは各研究室や教室であり、総体とはそれらを内包する建築全体を指す。個である各研究室等は、各々に固有の専門性を持ち、その固有性が尊重されるべきである。一方で建築全体としてのまとまりも重要である。その「個と総体」の固有性と秩序の両方を実現するため、計画においては、屋内外のまとまった広場空間が「かなめ」となり諸空間を位置付けている。つまり、個々の室は大きな広場とつながっており、広場を介して全構成単位が結合されている。一方で各室の固有性を担保するため、それらと広場との間にオープン階段や回廊を配することで、広場と一定の距離をとるように計画している。



出典：建築文化 1969年 10月号



本館 屋内広場の様子

② 建築の総体としてのキャンパス

冒頭でも述べた通り、金沢工業大学北校地は、段階的に建設された。部分の積み重ねによって全体を導くためにはマスタープランの存在が重要である。しかし、全体の完成までに長い年月がかかる計画には不確定要素が多い。したがって初期にマスタープランを確定させることは困難であった。そこで、第1期計画に合わせてコンセプトを示すマスタープランを策定するがそれを先行させず、各段階においてその妥当性を検証し修正していくという方法をとった。第1期計画当時、建築・都市計画において最初

に描いたマスタープランを絶対視する風潮があった。そこに疑問を持っていた大谷研究室にとって、このキャンパス計画はマスタープランのあり方の模索の場であった。各段階の計画は、各時点の要求や価値を実現することにとどまらない。既存の計画・施設をより豊かにし、さらに将来の計画の転換をより明確に方向付けるためのものであるべきである。実際に、第2期の計画時に第1期の計画や施設が修正された。第1期では雪国である敷地において通年使えるようにと屋内に広場的空間を設けていたが、

第2期ではそれと役割分担をするために屋外の広場を設けた。また、孤立状態となっていた土木工学館の前庭を新設するコルネードで繋ぐことにより、前庭を全体の構成に参加させた。さらに第1期において媒介空間に位置付けられていた廊下の役割を、第2期では拡張させた。様々な行為を可能にする空間とするため、廊下の幅員を広げて余裕を持たせ、家具等を配し、談笑等ができる空間とした。

③ 建築と都市

現代の建築はその立地する地域の秩序に関心を示さず、自己の固有性の追求に専念している。結果、建築は雑多なものの集積となった市街地に埋もれ、個々の建築の影が薄くなるという自己破綻の状況に陥っている。それを克服するために求められているのは、建築の固有性を否定することでも、市街地や都市といった総体の秩序の絶対的優位を主張するこ

とでもない。建築と都市、個と総体に関わる固有性と秩序の文脈を探り出し、それを成立させることが求められている。個と総体、固有性と秩序にこだわる理由は、現代の建築と都市の状況のもとで、まず1つ1つの建築の固有性を尊重し、その存在を確かなものにしたいからである。

参考文献

- 新建築 1969年 10月号 (本館・土木工学館)
- 新建築 1976年 10月号 (3号館・5号館)
- 新建築 1982年 10月号 (ライブラリーセンター)
- 建築文化 1968年 11月号 (キャンパス計画案)
- 建築文化 1969年 10月号 (本館・土木工学館)
- 建築文化 1976年 12月号 (3号館・5号館)
- 建築文化 1982年 10月号 (ライブラリーセンター)

6年竣工

第3期 1982年竣工

現在の姿

ライブラリーセンター



1976年 10月号)



第3期配置図 S=1:3000 (出典：新建築 1982年 10月)



航空写真 S=1:3000 (出典：Google map)

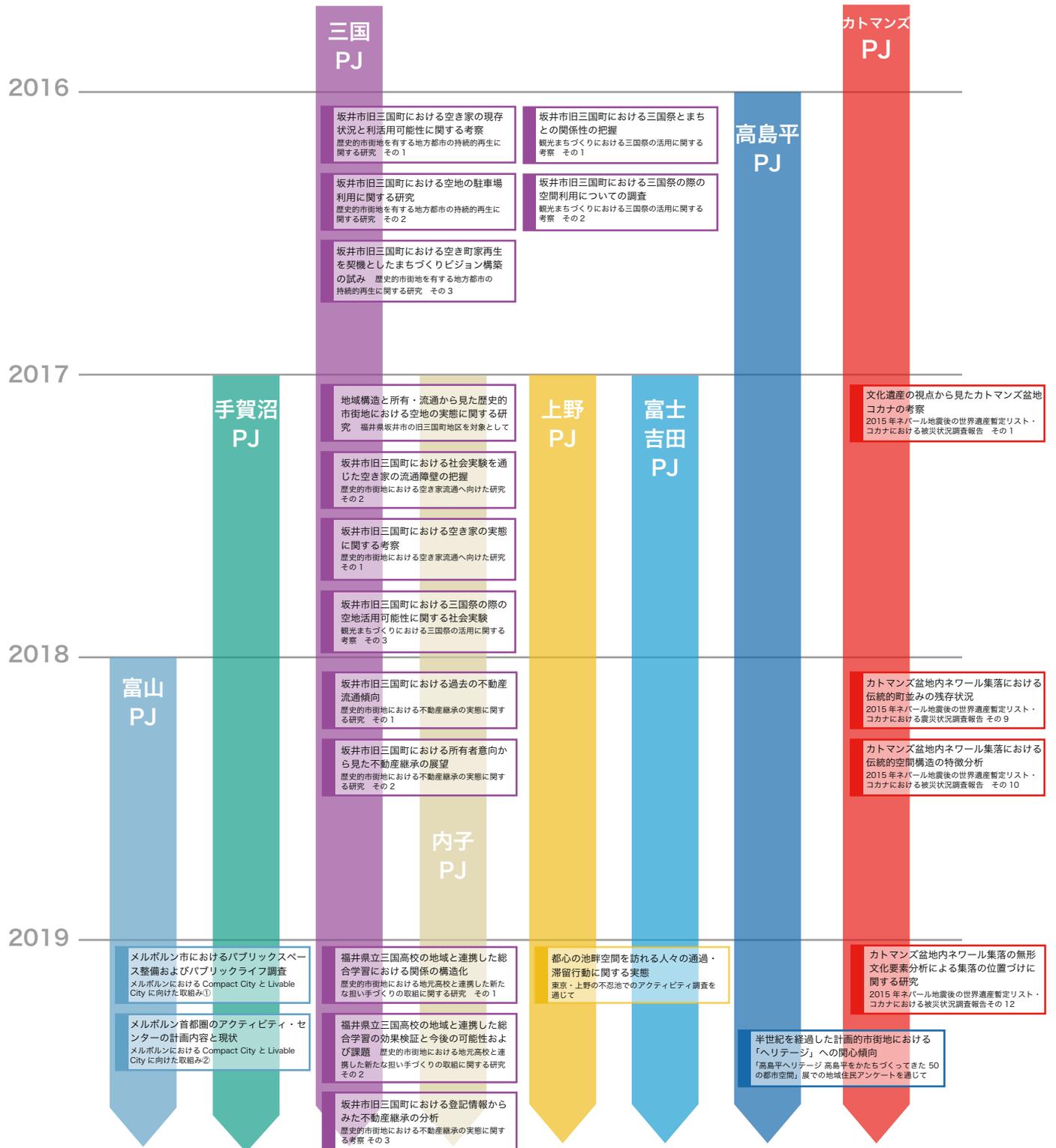
プロジェクトにおける実践・研究・発信

The Practice, Reserch and Presentation of the Projects.

都市デザイン研究室の大きなテーマは、対象地における実践と研究の2兎を追い2兎を得ることである。研究とは各々の学位取得に向けた研究はもちろんであるが、プロジェクトにおける実践内容を論理的に整理し、論文として発信することも重視している。下図に現在活動しているプロジェクトがこれまでに発表してきた論文の発表年とタイトルを示した。論文として発

表することによる効用は大きく4つあると考える。まず、我々の各地域における実践を全国に発信することで、他研究室の活動の参考となること、次に2年ごとに交代するプロジェクトのメンバーが、過去の先輩たちの蓄積を知り、それを踏まえて活動する手助けとなること、3つ目に発表者自身が、現在行っている活動がプロジェクトの活動趣旨にどのように貢献してい

るのかということを見つめ、整理するきっかけになること、4つ目に、自身の所属していないプロジェクトの活動について理解するきっかけとなることである。プロジェクトにおける実践・研究・発信は都市デザイン研究室の強みとして、これからも継続していきたい。



デザ研メンバーによる発表一覧

The List of Researches Presented by Members of Urban Design Laboratory.

今回の学術講演会では都市計画部門・農村計画部門において、研究室のメンバー個人による研究内容とプロジェクト活動に関する研究内容、計12本が発表された。発表者は昨年度プロジェクト活動に参加して

た研究室OB、助教、研究員、博士過程・修士課程の学生など幅が広い。ここでは、各論文の概要と発表者による研究・発表についての感想を紹介する。日本建築学会の論文データベース (<https://www.aij.or.jp/paper/search.html>) から検索することで各論文の梗概を閲覧することができるので、興味を持った論文についてはそちらも参照し、理解を深めていただきたい。

た研究室OB、助教、研究員、博士過程・修士課程の学生など幅が広い。ここでは、各論文の概要と発表者による研究・発表についての感想を紹介する。日本建築学会の論文データベース (<https://www.aij.or.jp/paper/search.html>) から検索することで各論文の梗概を閲覧することができるので、興味を持った論文についてはそちらも参照し、理解を深めていただきたい。

博士研究

戦後日本の建築専門誌における「みち空間」思想の構築と展開



○宮下貴裕・中島直人 特任研究員 宮下貴裕

論文の概要

近年わが国では公共空間論の高まりに伴い、道のあり方に関する議論が活発化している。しかし戦後における議論の展開についてはテクノクラートによる法整備や道路空間デザインの変遷が注目される一方、建築家や都市計画研究者など「民」の立場の専門家が蓄積してきた道に関する議論の文脈には関心が払われてこなかった。そこで本研究では、日本人が共有してきた道という空間イメージ自体に価値を見出し、道路空間のみならず、都市における空間を道と認識して展開した議論の変遷を、『建築文化』『SD』『都市住宅』といった都市・建築分野の専門雑誌に発表された言説から明らかにした。

その中では、歩行者空間論の文脈で



道の価値が再評価されるようになる以前の1960年代から、わが国の既存都市空間の分析を通して、そこに存在する空間の形態や人々の行動様式を明らかにするというアプローチが見られ、わが国の道の固有性に価値を見出す議論が多く蓄積されていたことが明らかになり、連続したコンテクストの存在が確認できた。

発表を終えて

修士の頃以来久しぶりの建築学会。博論の成果の一部を6分で発表するという無茶をやりましたが、短く簡潔に説明できないような研究は論理に説

得力がないということだと考え、なんとか発表することができました。そして、院生みんなの勇姿にも心を熱くさせられました。

修士研究

タイ・バンコクにおける国家・都市の近代化実験空間に関する研究



○玄田悠大・中島直人 D1 玄田悠大

論文の概要

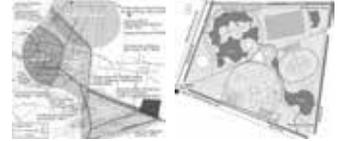
前大会でのドゥシッターニーを対象とした発表の続編。都市空間が社会へ与える効果・影響を明らかにするため、近代化に着目し、近代に関連する空間や制度を、社会へ導入する前に、実施および試行する取り組みを行った「近代化実験空間」の一つ「シャム王国博覧会計画」について研究を行なった。同計画は、1925年のラーマ6世即位15周年を記念してタイ・バンコクに計画された総合博覧会。最終的に実施はされなかったが、その後敷地はルムピニー公園となった。

研究を通じ、以下特徴を明らかにした。

1. 計画を契機とした都市開発の展開がなされたこと
2. 近代化途中である社会が理想とす

発表を終えて

2017年に執筆した修士論文を大きく2つにわけ2018年と2019年の全国大会で発表しました。論文執筆時から約2年経過していましたが、準



る近代国家像化している」と明示する空間であったこと

3. 国内外への近代国家像の訴求を通じ、理想とする近代国家像に対抗する動きの阻止を期待された空間であったこと

4. ナショナリズム形成過程で、近代化後発国の既存社会の支配者が、近代国家化された後も支配者であり続けるという政治状況の正当性を示そうとした空間であったこと

卒業研究

自発的な緑化を取り入れた都市緑地計画

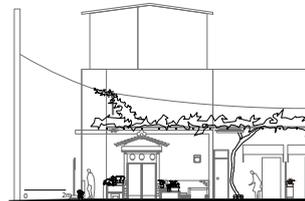
東京下町地域での実態調査を通して



○砂川良太・矢口哲也 M1 砂川良太

論文の概要

市民による自発的な緑化は、今後より一層重要となると考えられる。都市空間では様々な自発的な緑化がみられ、東京の下町地域を中心にみられる表出とよばれる行為もその例として挙げられる。個別に行われる自発的な緑化を都市緑地計画に取り入れ、都市緑地の機能を向上させるためには、それらのネットワーク化、植物の多様化、維持管理の持続化について検討する必要がある。本研究では、自発的な緑化を都市緑地に取り入れる方法を検討するために、台東区の浅草南と初音小路飲食街を対象に調査と分析を行った。本研究より、植木鉢等による自発的な緑化を都市緑地計画に取り入れたとき、①高密度な市街地内でも緑のネット



ワークを形成すること、②植物の多様性を向上させることの2点が可能になることが示唆された。一定量の恒久的な緑と、植木鉢などによる暫定的な緑を空間的に組み合わせた緑地は、自発的な緑化を取り入れた都市緑地の姿のひとつとして考えられる。

発表を終えて

卒業論文では、大好きだった東京のstreet gardenをひたすらフィールドワークすることで何かを発見しようと思いましたが、計画性のなさにより見事

に失敗。パワポを作り直す中で、改めて研究の「準備」の必要性を実感しました。

卒業研究

飲食店街における店舗の新旧に着目した景観の魅力の分析

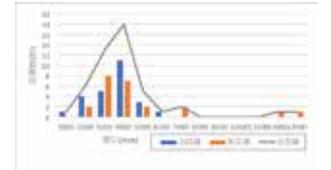
横浜市中区の野毛地区飲食店街を対象として



○宗野みなみ・高見沢実・野原卓 M1 宗野みなみ

論文の概要

近年、昭和の雰囲気を残す飲食店街が若い世代からの注目を集め、その世代をターゲットにした店舗の更新・デザインの変化が急速に進んでいる。町並み固有の趣を残しつつ、新しい価値を付け加えるにはどのような更新の方法をとればよいのであろうか、というところから本研究はスタートした。そこで、近年店舗の更新が顕著な野毛地区飲食店街を対象とし、店舗ファサードを構成する要素について、寸法・色・素材等を悉皆調査した。そのデータからヒストグラムを作成し、そのグラフの形状を新旧で比較して分析した。結果、各要素は「新店舗が旧店舗の特徴を引き継いでいる要素（間口長さ等）」「新店舗が旧店舗にはない特徴を付け



足している要素（開口部の素材等）」「新店舗が旧店舗の特徴の偏りを緩和している要素（壁面の色相等）」に分類できることがわかった。よって、新店舗がある部分では旧店舗の特徴を引き継ぎ、またある部分では新しい要素を付け足す、そのバランスを考慮して更新することが重要であるということがわかった。

発表を終えて

初めての学会発表。ピリピリとした会場の雰囲気に緊張しっぱなしでしたが、なんとか無事発表することができました。発表後、私の問題意識に共感

し、内容に興味をもってくださいました。方のお話が弾み、研究を学会を通して発信することの重要性を感じました。

メルボルン市におけるパブリックスペース整備およびパブリックライフ調査

メルボルンにおける Compact City と Livable City に向けた取り組み①



○仙石宇・中島直人・永野真義

M2 仙石宇

論文の概要

Livable City としても世界的に認められているメルボルンを対象に、“Livability”を高める施策の内容を調査した。

メルボルンはオープンカフェやトラムに代表される豊かなまちなかで知られるが、かつてはモータリゼーションの影響で閑散とした中心市街地だった。市は1980年代から徒歩での移動に着目した歩行ネットワークの強化と飲食店をはじめとした店舗の路上空間利用等による道路空間のアメニティ向上に取り組み、近年は路地の歩車共存化・歩行者専用化に注力している。



その効果は1993年から10年ごとに取り組みられているヤングール事務所によるパブリックライフ調査によって測定され、その結果が公表されることで都市デザイナーや建築家への理念を共有や、政治家や市民に対する投資の価値の発信につながっている。整備とその評価とが相互作用を生み、政策を前進させていると言える。

発表を終えて

初めての学会で数日の視察を行っただけの海外都市について発表というのはいささかハードルが高く、またなぜか「人口減少下」のセッションに振り

分けられるというアクシデントもあって価値を伝えきれなかったのでは、という悔いは残ります。メルボルンは良い都市なのでぜひご鼻

メルボルン首都圏のアクティビティ・センターの計画内容と現状

メルボルンにおける Compact City と Livable City に向けた取り組み②



○山口智佳・中島直人・永野真義

M2 山口智佳

論文の概要

オーストラリア、ビクトリア州メルボルン都市圏を対象に、郊外拠点となるアクティビティ・センター概念のe変遷と、アクティビティ・センターのうち、中規模センターにあたるメジャー・アクティビティ・センターの計画と現状を確認した。

アクティビティ・センターは都市中心の概念であり、現状3つの階層のセンターが存在する。州政府が大まかな場所を提示し地元自治体がフィジカル・プランにあたるストラクチャー・プラン等の計画をまとめて実行する。

アクティビティ・センターの概念が設定された1995年から現在に至るまでに、アクティビティ・センターは郊外拠点の概念のうちの一つから、都市圏の人口増加下で投資の中心としての性格を獲得しつつある。

次に中規模アクティビティ・セン



ターであるメジャー・アクティビティセンターのうち、歴史的商業中心を核とした構造を持つ4例の計画と現状を調査した。詳細な計画を盛り込めるストラクチャー・プランの開発誘導・規制の実現性を確認できた一方で、開発圧力の高いセンターでの好ましい高さを越えた開発の存在と、それに伴い強制力を有する計画への変換や、アクティビティ創出に関する限界も確認できた。

発表を終えて

全体的に時間のない中の調査+準備であったので、無事（なにかは分かりませんが…）に発表まで終わらせて安心していきます。地元自治体がフィジ

カル・プランを一つしっかり描き、それを軸に都市計画を進めることが出来ている点がすごく面白いポイントだと感じています。

半世紀を経過した計画的市街地における「ヘリテージ」への関心傾向

「高島平ヘリテージ 高島平をかたちづけてきた50の都市空間」展での地域住民アンケートを通じて



○藤原大樹・箭川展・松本大知・中島直人

M2 藤原大樹

論文の概要

現在、日本各地のニュータウンや公園団地などの計画的市街地の数々は開発から50年程度経過し、更新の時期を迎えています。多くの計画的市街地で当時の設計思想や計画意図を振り返っていますが、そこに暮らす住民自身がいかなる都市空間を「遺産」として認識しているかを把握することもまた重要であると考えられます。

私たちがプロジェクトの対象地としている高島平も計画から50年が経過した市街地であり、今年の3月には「高島平名称誕生50周年記念イベント」として様々な活動が行われました。その中で私たちが企画した「高島平ヘリテージ50」の展示でのアンケートを通じて、住民自身が自ら住む都市空間に対してどのような関心を持っているのか、その傾向を明らかにすることを目的としました。

発表を終えて

発表後に、『「ヘリテージ」と「地域資源」の違いにはどういふものがありますか?』という質問がありました。『「ヘリテージ」は時間の重層性を持つ



アンケート分析結果として、①対象地域内外を問わず広く関心が集まること、②年齢層により関心を持つ形成時期が異なること、③空間的広がりを持つ都市空間が多様な年代から関心が集まることなどが分かり、今後の都市空間の継承を考える際、地域内の一般に歴史的価値が認められる遺産だけでなく、住民の年代や生活圏を考慮して様々な遺産を検討することの重要性が示唆されました。

ています」というように咄嗟に答えましたが、なんとなしに使っていた「ヘリテージ」という言葉の意味を考える良い機会となりました。

都心の池畔空間を訪れる人々の通過・滞留行動に関する実態

東京・上野の不忍池でのアクティビティ調査を通じて



○永野真義・中島直人

助教 永野真義

論文の概要

上野プロジェクトの初年度、2017年秋に取り組んだ不忍池アクティビティ調査の内容を報告した。のべ5,000人をカウントした出入口通行量調査、1,000人以上をマッピングした滞留調査、100人以上を調査したトレース調査。3つのデータをもとに、量・質の観点から、都心の池畔空間における人々のアクティビティを分析した。

池畔は敷地際に場が集中し、通過・滞留とも周辺環境との『接続性』に影響を受けやすい。また人々の活動に『方向性』があり、中央の池という共通空間により、多様な活動の並存と囲炉裏を囲むような関係性が生まれている。『可変性』も重要な要素として捉えられたが、池畔の特徴である季節による可変性についての調査は今後に残す課



題である。また非施設型の『無料性』が多様な来訪者を寛く受け止めていた一方、既存施設はその周辺の滞留環境との関係性を再考する余地が認められた。

発表を終えて

研究室OBで横浜国大の野原卓先生が司会、上野PJでも関わり深い理科大・宇野求先生が耳を傾ける中でのセッション発表は大変光栄だった。梗概発表は時間が極めて短いだけに、プ

ロセス・結論をいかにシンプルにファイするか。本調査も膨大なデータ量であったため、何が本質的だったかを振り返る、貴重な機会となった。

三国PJ

福井県立三国高校の地域と連携した総合学習における関係の構造化

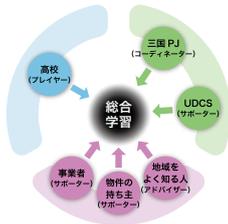
歴史的市街地における地元高校と連携した新たな担い手づくりの取組に関する研究 その1



○伊藤智洋・前山倫子・中島伸・矢吹剣一
地域デザイン研 OB 伊藤智洋

論文の概要

昨年度携わった三国高校1年生の総合学習「空き家を使ったイベント企画」について、地方公立高校の地域連携授業のケーススタディと位置付けて二部構成で発表しました。本授業は地域の空き家を4軒お借りし、地域の方の協力を仰ぎながら、高校生が企画したお店を1日だけ開くというものです。私が担当したその1では、授業に関与した各主体間の関係性を整理したうえで、その構造から見える可能性と課題の把握を試みました。統廃合の危機がある中で特色あるカリキュラムで差別化を図りたい高校、高齢化や人口流出の進むまちの若き担い手を育てたい地域の人々やそれを支えるアーバンデザインセンター坂井(UDCS)、実践と研究のフィールドを持ちたい大学。高校が実働部隊として、地域の方々がサポーターとして、UDCSが



地域と高校の媒介者として、大学が全体を統括するコーディネーターとして参画した様子を概観し、各主体が他者の課題に応えるよう相互補完的に授業運営を支えた一方で、地域側の「担い手の確保」という目的のための動きを行える体制がなく、高校と地域の間でアンバランスな関係があったことを整理しました。

発表を終えて

本大会で「高校」の名のつく題目は我々だけ。その分発表後も授業成立の背景などについて複数の方に質問を頂きました。学会は一日だけの参加でし

たが、何もしなければ日目の目を見なかったかもしれない活動が、発表を介して議論の対象となってくれたことは大きな成果でした。

三国PJ

福井県立三国高校の地域と連携した総合学習の効果検証と今後の可能性および課題

歴史的市街地における地元高校と連携した新たな担い手づくりの取組に関する研究 その2



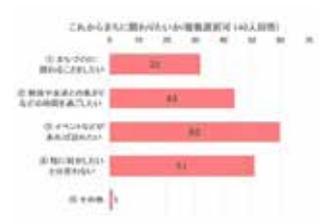
○前山倫子・伊藤智洋・中島伸・矢吹剣一
M2 前山倫子

論文の概要

伊藤さんの発表に引き続き、福井県立三国高校で実施した総合学習のアンケートなどによる効果およびそこから導かれる可能性と課題について、高校魅力化に向けたカリキュラムの確立という高校側の視点、地域の担い手獲得につなげるために高校生と地域との関係の変化という地域側の視点から検証し発表しました。

総合学習は現在も継続されておりカリキュラムとして定着が見込めること、地域への印象を尋ねる生徒へのアンケート結果より地域と連携した授業を行うことで地域の魅力の発見につながるなど、今後の地域との関わりについての質問からまちづくり活動への参加意欲の向上の可能性があることが大きな成果として考えられます。

一方で地域側の反応として、イベン



ト自体は好評なもの高校生を地域に巻き込む動きにつながるような影響は得られず、総合学習を継続していくことはもちろん、地域住民の参加機会を増やすことや地域側が高校生の活躍できる場を用意することなど、改善の余地があります。

発表を終えて

初めての学会で緊張しきりでしたが先輩や先生に助言をいただきなんとか(悔いはいりますが)発表を終えました。いろいろな発表やパネルディスカッションなどを聴講し狭まりがちな

視野を広げ、一門会ではたくさんの先輩とお話しし、本当に良い環境にいるなあと改めて実感しました。また参加したいです!

三国PJ

坂井市旧三国町における登記情報からみた不動産継承の分析

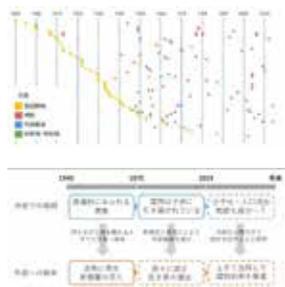
歴史的市街地における不動産継承の実態に関する考察 その3



○但馬慎也・中島伸・矢吹剣一・西村幸夫
都市デザイン研 OB 但馬慎也

論文の概要

これまで三国プロジェクトで行ってきた不動産継承に関する研究の1つで、2017年度に実施した居住者に対するヒアリング調査の不明確な部分を補完するものである。登記簿や、旧土地台帳から取得した登記情報を整理し、土地の所有や不動産の継承について明らかにした。三国町の不動産継承は特に戦後から1970年頃にかけて外部への継承が多みられており、特に前の所有者がその土地を離れてから不動産を継承する傾向が強かった。1970年代を過ぎると、相続による継承はそれ以前と同様に行われているが外部への継承は少なくなっており、三国町内で新たな人への不動産継承が鈍くなっていると推測される。特に不在地主となった場合に、次の居住者へ受け渡されるケースが少ないことが空き家問題の大きな原因となっている。今



後は新規居住層を呼び込み、物件を使い続けていくことが必要と考えられる。最近では、複数の所有者で土地を継承してくることが難しくなり、自治会単位で土地を所有するという形態が見られている。この例から所有が複雑になった土地に対しての新たな土地の管理の可能性が見られている。

発表を終えて

不動産継承に関する調査は自分がこれまで自分がメインで進めていた部分だったので、成果をちゃんと発表したいという気持ちがあり参加しました。

準備は普段の仕事内容と違う頭の使い方をした点もあって少し大変でしたが、いい刺激となったと思いました。

カトマンズPJ

カトマンズ盆地内ネワール集落の無形文化要素分析による集落の位置づけに関する研究

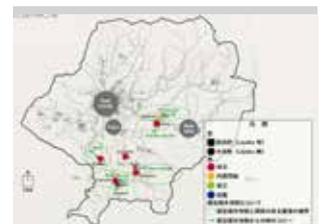
2015年ネパール地震後の世界遺産暫定リスト・コカナにおける被災状況調査報告その12



○原洪太・永門航・森朋子
M2 原洪太

論文の概要

2015年4月25日のネパール地震後の再建で、カトマンズ盆地に広がるネワール集落は、非伝統的な建物が並ぶようになっているため、建築物の保全に関する規制が必要となる。建築単体のみならず、集落の空間構成についても、保全を考える必要がある。



前々稿(その10)で集落の空間構成の理解のために、無形文化に触れる必要を見出した。そこで今回は集落で行われる祭りを中心とした無形文化面を明らかにすることを目的とした。

が見出された。そこでその差異に応じて集落の類型化を行った。その結果が上図である。

昨夏の調査において、祭りのルートなどに関連し、集落の居住域を囲むようにして配されるAstamatrikaという8柱の女神がいること、祭りのルートの中継地点、祭りの行い方、さらに居住域外に存在する大規模寺院との関係性、火葬場の配し方、元の宮殿であるLayakuの有無などに集落ごとの差異

多くの無形文化要素を自らの中で持つ集落を「自立」としており、この分類に入るものは盆地内での文化的な重要性が高い可能性がある。ただ不明確な要素が多くあり、分類そのものも精度を高めることを要する。無形文化に関するさらなる調査が必要となる。

発表を終えて

不明なことが多い中、調査でわかった範囲でということ、発表者としては中々難しい点も。一方聞く側としては発表は性格上、荒削りな面もある一

方でそれだからこそ似た分野の人の、捉え方、考え方が出てきていて、吸収できることが多くあり、充実していました。

門下生、大集合！

Students under Prof. Nishimura are Gathering!

text_FUJIWARA/M2

建築学会 3日目の9月5日に、学会恒例の西村研ファミリーでの懇親会が開かれました。かつて当研究室の助教・准教授として活躍し、全国各地で自分の研究室を持つ先生たちとその学生が一堂に会する貴重な機会をレポートします。

今年の懇親会は、東京大学都市デザイン研究室のほかに、九州大学(黒瀬先生、江口先生)熊本県立大学(鄭先生)、神戸芸術工科大学(西村先生、矢吹先生)、札幌市立大学(森先生)、首都大学東京(岡村先生)、東京大学地域デザイン研究室(窪田先生)、東京大学社会基盤学専攻(萩原先生)、東京都市大学(中島伸先生)、新潟大学都市計画研究室(松井先生)、横浜国立大学都市計画研究室(野原先生)、立教大学(西川先生)、龍谷大学(阿部先生)、和歌山大学(永瀬先生)と、計12の大学、研究室が参加し、教員、学生合わせて50名を超える大宴会となった。



横国大の野原先生によると、この建築学会のたびに開催される懇親会のはじまりは、数年前に何人かの先生たちで集まって開かれた飲み会のようなものだそうである。それから毎年集まるメンバーは違えども、徐々に増えていき、昨年はおよそ40名、今年は50名を超えているのであるから、西村先生一門の結びつきというのはとても強いものがあるのだなと感じさせられる。都市デザイン研究室

からは10名の学生が参加し、各研究室の学生たちと懇親会後に二次会を開くほどに交流を深めていたようである。

筆者は今回が初めての建築学会参加で、この懇親会も初めてであった。学会のような畏まった場で、偉い先生の講演や学生の発表を聞いたり、自分が発表をしたりするのも良い勉強になるが、飲み会の席で高揚した気分のもと、ひとの研究の悩みを聞いたり、自分の研究の相談をしたりするのもまた変な緊張を強いられることがなく、赤裸裸でいられるからかえて実りが良かったりする。

筆者は無意識に東京を中心に物事を考えてしまいがちだし、研究も東京を対象として行っているが、他地方の大学の学生と話していると自分の見聞の狭さが浮き彫りになるようで、自分に嫌気がさすような、身が引き締



まるような気がしてきて、酔いが醒めた。

今回はプロジェクトの成果を発表したが、胸を張って「自分の研究だ」と言えるほどのものではなかったように感じている。修士論文をしっかりとまとめ上げ、また来年、2020年の壇上から自分が見つけたものを語りつくして、良い酒を飲みたいものだ。



▲最後に撮った記念写真、西村先生を中心に研究室の輪が広がる

Information



Hey listen, -ちょっと聞いて!

9.1 三国PJ 夏季調査後半戦!



サイン調査に引き続き、三国の食と町家についてのヒアリングを行いました。地元の集まりにお邪魔し、にぎやかで楽しい時間を過ごしました! (M2 前山)

9.23 山口さん、留学先へ



私事ですが交換留学制度を利用して秋学期より1年間、ウィーンに留学します!一年後が全く想像できていないのですが、いろいろと頑張ります。(M2 山口)

9.22 手賀沼PJ 生き物観察会



PJにて昨年設計した生き物観察池にて生物観察会を行いました。予想を上回る親子が参加し、みんなの観察池になって嬉しく思いました。(M1 松本)

9.24 初秋の旅立ち



研究室の秋追いコンが開催され、中戸さん、飯村さんの2名の修了に祝杯をあげました。力強い抱負の言葉を頂き、我々も身が引き締まる思いで一杯でした。(M1 西野)

夏休みも終わり、ついに後期が始まりました。各プロジェクトでは後半の追い込みがかかるようになり、新たな舞台に旅立つ人もいました。研究、がんばりましょう。

9月のWebマガジン

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



9.7 ぼくのなつやすみ

皆さんが建築学会に行く中、私は東京でインターン。つかの間の休息に、鏡子に行っていました。(M1 應武)



9.21-22 アーツ&スナック運動

「アーツ&スナック運動」を実施しました。空きスナックに挿入されたアーツをめぐるイベントです。(M1 砂川)

10月の予定 Lab Meeting

8th(Tue.)	三国PJ 三国高校レクチャー
8th-10th	内子PJ 森家検討会
12th(Sat.)	高島グリーンテラス vol.4
12th-13th	小高PJ 菜園講習会
19th-20th	展示『浦安元町の風景を考える』
19th-20th	小高PJ 秋祭り
26th(Sat.)	手賀沼PJ 生き物観察会

✂ 編集後記

全国の建築系研究者が一堂に集まる建築学会。論文発表のみならず、作品展示やパネルディスカッション、そして懇親会と、様々なコンテンツが用意され、刺激的な4日間であった。さらに今回は会場が本研究室の先輩方による設計であるという一大事。この気分の高揚をなんとか共有したいと思いまとめたのが本号である。また、本研究室のプロジェクト活動は実践だけでなく、その成果を広く発信することにも力を入れている。研究室メンバーの発表論文を列挙し、迫力をもって伝えることも重要なテーマであった。(M1 宗野)

■ マガジンへのご意見・ご感想をお寄せください

ご意見やご感想を投稿していただけるフォームを試験的に開設いたします。QRコードまたはURLよりアクセスし、お気軽にご投稿ください。



URL: <https://forms.gle/M33De1hfNReuMDxJ7>